

自律的英語学習を促進する心理的要因と 授業内における自律を促進する活動

末森 咲

キーワード：英語学習、学習者、自律

English language learning, learner, autonomy

1. はじめに

社会のグローバル化に伴い、日本の社会における英語の重要性は高まっている。英語に限らず、外国語を習得することは容易ではなく、膨大な時間を費やすことが必要不可欠であると考えられている。例えば、松村(2009)によると、日本人にとって、英語を身につけるためには、約4000時間費やす必要があると示されている。さらに松村は、日本の中学校、高校、大学(2年間)において、1年あたり約140時間英語の授業時間数があると示している。つまり、中学校から大学まで8年間学んだ場合、学校では、約1120時間学んでいるということである。これは、英語を身につけるために必要だと推定される4000時間には到底及ばない。つまり、学習者はそれぞれ、教室外で自ら進んで学んでいくことが必要不可欠なのである。このように、自ら進んで学ぶこと、つまり自律して学習に取り組むことは非常に重要である。外国語学習においては、自律した学習者を育成することが最終的な目標であると考えられている。しかしながら、どうすれば自律した学習者を育成することができるのか、また自律した学習者となる上で、何が影響を与えるのかという点についてはそれほど研究がなされていないのが現状である。

このような現状を踏まえた上で、本論文では、3名の学習者に着目することで、何が自律した英語学習を促進するのか、特に心理的要因に着目した上で、考察を行う。その上で、教室内で取り入れることができる、自律を促進する、また学習者の自律を尊重した活動を紹介し、自律した学習者を育成する方法について考えていきたい。

2. 自律について

自律という語はいろいろな場面で使用されるが、本稿では、学習における自律に着目す

る。様々な定義が存在する中で、Holec (1979) が最も初期の定義だと考えられる。Holec (1979) は、自律を「自分の学習に責任を持つ能力」と定義している。この「自分の学習に責任を持つ」とはどういうことかという、学習を行う上での判断に対して、責任を持っている状態を指す。例えば、学習の目的を自分で決める、学習方法を自分で決める、自分の学習を評価するなどがあげられる。

Holec (1979) に基づいた上で、Benson (2011) も同様に自律を定義している。また自律の特徴として、「多面的な能力」を挙げている。これは、自律が何を指すのかは、個人や文脈によって異なり、また同じ個人であっても、文脈によって異なるということを示している。例えば、英語学習において、自ら進んで取り組むことができたとしても、数学において同じように取り組むことができるとは限らない。また、ある一時点で自律した様子が見られたとしても、また別の場面で同じように自律した様子が見られるとは限らないのである。このように、自律は個人や文脈によって変化が見られる多面的な能力なのである。また、もう1つの特徴として、発達段階があることがあげられている (e.g., Nunan, 1997)。自律は、自律しているか、していないかという二者択一ではなく、程度があるものとして考えられている。

自律に関する研究は、様々なものが実施されているが、ここでは、博士論文である Murase (2011) を紹介したい。Murase は、自律を測定する質問紙開発を目的として実施された。まず自律という概念を先行研究に基づいて詳細に説明し、その上で、関連した質問紙を紹介している。また、実際に質問項目を検討し、日本の大学生を対象にパイロットスタディを実施した。そして、最終的に1,000名以上の大学生を対象に調査を実施し、質問紙を作成している。Murase は、授業にて自律を促進させる活動を行なった結果として、活動前後で変化が見られるかどうか確認するために、自律を測定する質問紙を作成することが必要であると述べている。このように近年では、学習者の自律を測定する質問紙の開発も進められている。

3. 本研究の目的

本研究の目的は、日本人大学生の英語との関わり方に着目することで、何が教室外の自律した英語学習を促進させるのか、特に心理的側面に焦点を置くことで検討することである。本研究における、「自律した英語学習」とは、学習者が必修の英語授業以外で取り組んでいる英語学習や英語を使用する活動のことを指す。本研究では「自律した英語学習」をあえて幅広く捉えることで、何が自律した英語学習と考えられるのかという点も考えていきたい。また、本論文の最後では、教室内で取り入れることができる活動を紹介し、自律した学習者を育成する上での取り組みも説明していく。

4. 研究方法

本研究では、半構造化インタビュー調査を実施し、また参加者は各自、学習記録シートに学習を記録した。以下研究方法を説明していく。

4.1 参加者

本研究では、日本人大学生6名を参加者とした。この参加者は、2015年に実施された質問紙調査に参加し、その際、インタビュー調査参加への興味を示した参加者である。参加者の詳細は表4.1の通りである。本論文では、この6名のうち、3名の学習をみていく。この3名を選択した理由は、それぞれ英語学習に対する姿勢や取り組みが異なっており、違いが見られたからである。学習における自律を考える上で、異なる特徴を示す学習者を見ていくことで、自律という概念の理解へつながると考えられる。

表4.1 参加者一覧

| 名前(匿名) | 学 年 | 専 攻 |
|--------|-----|-----|
| レ イ | 3 | 地 理 |
| ユキコ | 3 | 社会学 |
| エ ミ | 2 | 数 学 |
| マ リ | 3 | 英文学 |
| サユリ | 2 | 日本語 |
| ハルナ | 2 | 物 理 |

4.2 データ収集と分析

4.2.1 インタビュー調査

2016年1月より、1学期に2度ほど、半構造化インタビュー調査を実施した。参加者には、事前に注意事項として、いつでも研究参加をやめることができる点、また分析にあたっては仮名を使用し、個人が特定されることはない点を強調し、説明した。インタビューはそれぞれ30分から40分程度であり、すべて日本語で実施した。インタビューにおける質問項目例は、資料2の通りである。

4.2.2 学習記録

参加者はインタビュー調査に加え、日々自分が取り組んでいる英語学習を、Kato and Mynard (2015) に基づいて作成された学習記録用紙(資料1)に記録した。1ヶ月あたり、B4 1ページの分量であり、参加者はまず1ヶ月の目標を設定し、その上でなんらかの学習に取り組む。そして、その学習に対する振り返りを記入し、最後には1ヶ月全体の振り返り、また来月どのように学習に取り組みたいかということを書き入れる欄も設けた。参加者は各自記入を行い、インタビュー実施時に数ヶ月分まとめて提出を行なった。

4.2.3 調査参加状況

参加者の調査参加状況は表4.2の通りである。インタビューに関しては、6名ほぼ全員が

表 4. 2 参加者の調査参加状況

| 名前 (匿名) | 学 年 | 専 攻 | インタビュー参加状況 | | | | 学習記録 |
|---------|-----|-----|------------|------|------|--------|------|
| | | | 1-2月 | 4-5月 | 7-8月 | 10-11月 | |
| レイ | 3 | 地 理 | ○ | ○ | ○ | ○ | — |
| ユキコ | 3 | 社会学 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| エミ | 2 | 数 学 | ○ | ○ | ○ | ○ | — |
| マリ | 3 | 英文学 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| サユリ | 2 | 日本語 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ハルナ | 2 | 物 理 | ○ | ○ | ○ | — | — |

4回のインタビューへ参加している。ハルナに関しては、途中で連絡が取れなくなってしまったため、3回の実施となった。また、学習記録に関しても、6名の参加者全員に記録をお願いした。しかし、実際に提出があったのは、ユキコ、マリ、サユリの3名のみであった。このようになってしまった理由として、学習記録が参加者の負担となってしまったのではないかと考えられる。参加者は授業等とは全く関係なく、この調査に参加し、この調査のためだけに学習記録を行なった。よって、この調査のためだけに学習記録に取り組むことが、負担となってしまったのではないかと考えられる。学習記録の提出がなかった参加者に関しては、インタビュー実施時に詳細に学習への取り組みを確認し、補うよう心がけた。

4. 2. 4 分析方法

インタビューに関しては、インタビュー実施後、すべて書き起こしを行なった。そして、特に自律的英語学習促進に影響を与えていると考えられる心理的要因に着目した上で、コード付けを行なった。今回は、谷津 (2015) に基づき、分析を行った。谷津 (2015) では、コード付けは2段階に分かれている。まず、1段階目のコード付けは、洗い出し段階のコード付けと呼ばれ、研究者は、データを注意深く読み、意味のまとまりに沿って区切り、データに忠実な名前を付けていく。そして、2段階目のコード付けは、まとめ段階のコード付けと呼ばれ、1段階目に出てきたコードを分類、整理、統合し、コードに共通して見出される意味を表す名前を付けていく。今回は、この手順に基づき、コード化を進めていった。また学習記録に関しては、提出した参加者が少なかったことから、インタビュー結果の理解を助ける資料として活用した。

5. 結果と考察

ここでは結果として、3名の学習者の学習を1名ずつまとめていく。まず参加者の背景、英語とどのような関わりが見えるか説明し、その上で、そのような英語との関わり方へ影響

を与えていると考えられる要因を示していく。

5.1 レイ

5.1.1 レイの背景と英語との関わり

レイの英語学習のはじまりは、中学校入学前に自宅で英語教材を使用して英語に触れていたことに遡る。レイは英会話教室に通うなどしていたわけではないが、教材の文章を暗唱するなどしていたそうである。意味は全く分からなかったそうであるが、英語に対する興味から取り組んでいたと考えられる。このような状況から、中学校で英語の勉強が始まることを心待ちにしていた。中学校入学後も非常に楽しく英語の勉強に取り組むことができた。授業で紹介された歌の歌詞を覚えたり、勧められたラジオ番組を定期的に聞くなどしていたようである。また、高校生になると、大学卒業後に留学することを目標とすると決めた。大学入学後は、この目標を達成するために、日々英語学習に取り組んでいる。

このように英語を学んできたレイであるが、大学では、必修の英語授業に加え、選択の授業にも参加している。ライティングやTOEFL iBT対策の授業に参加し、英語を学ぶ機会を作っている。また、課外活動では、英語ディベート部に所属し、ディベートの大会にも積極的に参加しているようである。英語を聞いたり、話したりする機会が非常に多い。そして、留学のために、TOEFL iBTのスコアを伸ばす必要があることから、必要なスコアを取得することが、彼女の目標の1つである。スコアを伸ばすために、ありとあらゆる方法を試しながら英語学習に取り組んでいる様子が見られる。

5.1.2 レイの学習へ影響を与えている要因

このように、レイは非常に積極的、かつ前向きに英語学習へ取り組んでおり、英語力を向上させたいという強い気持ちを持っている様子がうかがえる。このような英語の関わり方へ影響を与えていると考えられていることの1つは、明確な目標設定である。前述のように、レイは留学に必要なスコアの取得を目標の1つとして掲げている。その目標を達成するために、英語力を伸ばしたいという気持ちを常に持ち、困難な状況であっても、その気持ちがレイの英語学習を支えている様子が見て取れる。

院に留学したいという気持ちがあるので、常に一定レベル以上の、こう英語をうまくなりたいたいという気持ちがありますね。(2016年2月)

(授業が苦痛であったことに対して) そのTOEFLの点数をたくさんとって、院に留学したいというのがあったので、やっぱり英語力をあげようっていう気持ち自体は変わらなかったのが大きいかなと思います。(2016年8月)

また、レイは、スコアという具体的な数字によって、自分の英語力を客観的に把握することもしている。このように自分の英語力がどれくらいなのか、数字で把握することも、英語をもっと勉強しよう、しなくてはという気持ちを促すことにつながっていると考えられる。

(TOEFL iBTの模試で) すごく良いスコアが取れたんですね、自分的には。だったので、だからもう、もっともっとがんばろうって気になって。(2016年2月)

(実際のTOEFL iBTを受験して) まだ最低レベルに達しなかった、ちょっと辛かって感じでしたね。(2016年4月)

レイはさらに、自分の英語力に対して不満を感じている。自分の英語力に満足していないという状況も、彼女の実際の英語学習を促す要因の1つではないかと考えられる。

一番自分の英語力に不満を感じるときってというのが、最近では、よく国際関係のニュース、BBC、CNNの記事とかtwitterフォローしてるんですけど、なんか、気になった記事あったら、ぱっと見るんですけど、なんかこう、やっぱり全部英、英字でかたい文章だと、あの、日本語で読むときより、全然読みにくい、当たり前なんですけど、そのときには、ちょっと読み通すのが難しいときがあって、気軽に読めないっていうのが不満で。(2016年2月)

このように、レイの英語学習は、まず明確な目標を設定することで、英語学習に積極的に取り組むことができていると考えられる。また、学習のプロセスにおいて、自分の英語力を把握すること、不満を感じていることが、英語学習を続けることに対する原動力へとつながっていると考えられる。

5.2 ユキコ

5.2.1 ユキコの背景と英語との関わり

ユキコは小学生の頃から英会話教室に通っており、それが英語との関わりのスタートであった。そのときのことはそれほど覚えていないようであるが、しばらく通っていたことから、苦痛ではなかったようである。中学校に入学後、英語を教科として学び始めることとなったが、英会話の授業では強い不安を抱いていたりと、英語に対して非常に強い苦手意識を持っている。また、他の教科の学習と比べると、英語学習はスムーズに進まなかったようである。よって、英語は他の教科とは異なるのだというような認識も持っている。

ユキコは必修授業を中心に英語を学んでいる。そのため、レイのように選択の英語授業へ

参加するということはせず、また英語を使うような課外活動にも参加していない。しかし、自分なりに英語学習に継続的に取り組むことはできている。英語学習記録からは、シャドーイング、自分の興味のある英語記事を読む、TOEFL ITPの勉強に取り組む様子が見られた。ユキコはこの3つの活動を中心に英語学習へ取り組んでいる。継続して英語学習に取り組む様子がよく見られた。

5.2.2 ユキコの学習へ影響を与えている要因

このようなユキコの英語との関わりへ影響を与えている要因の1つとして、まず苦手意識が挙げられる。英語に対して非常にネガティブな気持ちを持っており、自分は英語が苦手、できないという気持ちが強い。

(中高での英語学習について) 苦手意識もあったので、極力最低限以外は使いたくないみたいな。(2016年2月)

中学のころから、5教科で1番成績が悪かったんで。(2016年2月)

また、明確な目標が欠如していることも、ユキコの英語学習を妨げている要因の1つであると考えられる。

やっぱりなかなか、TOEFLみたいな明確な目標があるわけじゃないので、なかなかこう、何に向けてやってるみたいなのが、ないっていう状態でやるのは、難しいところはあったんですけど、まあただその、文献を授業で読んだりとかっていうことをしないといけないとかもあったので、まあ少しは役に立つかなとか思って、そのへんを小さいながらも、目標ってほどでもないですけど。(2016年7月)

継続して英語学習に取り組むことはできているが、「こういうことができるようになりたい」という明確な目標がないことが、英語学習との距離を広げてしまっていると考えられる。

このようにユキコは、英語に苦手意識を持っており、明確な目標を持っているわけではない。しかしながら、自分のペースで継続して学習に取り組むことはできている。このような取り組みに影響を与えていると考えられることは、やらないといけないことはやるという彼女の強い気持ちである。

もともと私がそういう予習とかっていう、こう絶対にやらなきゃいけない作業の最低ラ

インみたいところはとりあえず、別に英語じゃなくてもとりあえずやらなきゃっていうのはあって。(2016年2月)

(TOEFL ITP受験に関して) 全員受けるっていうことで、受けなきゃいけないんだろうなって思って、でまあ、受けるからには何もしないわけにもいかないしみたいな。

(2016年4月)

これ(学習記録)書かなきゃいけないし、多分それでやらなかったら、ここほぼ真っ白なんですよ、私。なので、こういうのもあるし、試験あるし、やるかみたいな。

(2016年4月)

このような発言からも明らかであるように、ユキコは苦手なことであっても、やらなくてはならないことはやるという強い姿勢を持っていることがわかる。この強い気持ちや、彼女の英語学習への取り組みを後押しすることにつながっているのではないかと考えられる。

また、苦手意識は感じているものの、漠然とした英語の必要性を理解することもできている。

でもやっぱり英語って絶対なにかちょっとでも必要になると思うので、そういう場面でも。良い機会だからやったほうが良いかなみたいな。(2016年4月)

自分の将来像自体が漠然としすぎてて、ちょっとなんかあれなんですけど。漠然としてるからこそ、将来何をやってるかわかったもんじゃないし、なんか、だからどこ行ってもおかしくないから、てことは、それだけ、その、英語が必要になってしまう可能性もある、高いような気がするみたいな、そういう感じ、感覚がなんとなくある感じですかね。(2016年4月)

なんのために勉強するかっていうことになると、やっぱり、いつ必要になってもおかしくない気がするというか。(2016年7月)

このように、ユキコは英語の必要性を漠然とはあるが、理解している。将来何をしているかわからないからこそ、英語にも取り組み、準備しておくことが必要ではないかと感じているようである。

ユキコは、英語に対する苦手意識を長年持っており、そのことが、明確な目標設定を妨げ、積極的な英語学習を阻害することにもつながっていると考えられる。しかしながら、「苦手であっても、やるべきことはやる」という強い姿勢を持っており、英語の必要性も理解して

いる。このように、自分をコントロールする力の強さがユキコの自主的な英語学習への取り組みへ影響を与えているのではないかと考えられる。

5.3 エミ

5.3.1 エミの背景と英語との関わり

エミは小学生の頃から英語教室にて英語に触れていた。しかし、中学校入学の段階で、それほど周囲との差は感じなかったそうである。英語に対する苦手意識が強く、高校生のときの出来事がきっかけで、英語が嫌いになった。また、国語ができないのだから、英語もできないのではないかと、できないに決まっているというような考えを持っている。

エミは必修授業を中心に英語学習に取り組んでいる。基本的には授業以外の英語学習はしていないと本人は認識しているため、ユキコのように、自分で何らかの学習に取り組むということはしていないようである。しかし、エミは一時期、大学院進学を検討しており、その際はTOEFL ITPに向けて、単語や文法の学習に取り組むこともできていたようである。

5.3.2 エミの学習へ影響を与えている要因

このようなエミの英語学習への取り組みへ影響を与えていると考えられる要因の1つは、目的や意義が見出せていないことである。

(TOEFL ITP受験について) 何のためにやるのかわかんないし、正直クラス分けはいつでも良いみたいな。(2016年2月)

(英語の授業に対して) 別に高校のときと変わらないような英文出されて、訳してきたからなんなんだろうみたいな。(2016年2月)

(英語の授業に対して) 正直何の意味があるんだろうみたいな。(2016年10月)

なんか、単位がくればまあ良いじゃないかみたいな。(2016年2月)

授業のクラス分けテストのために受験することになっているTOEFL ITPに関しても、授業に関しても、エミはなぜやる必要があるのか、理解することができていないようである。自分なりに目的や意義が見出せていないことが、エミの積極的な学習への取り組みを妨げる要因の1つではないかと考えられる。

このように、エミは基本的には目的意識を持って取り組むということとはしていない。しかし、一時期「大学院進学」という目的を掲げていた際には、自分の意思で学習に取り組むこともできていた。

急に、なんか、大学院行こうかなと思いはじめて。今まで英語があんまり苦手だし、そのために勉強するのもなんかと思って、あんまりって思ってたんですけど、最近いろんな人から、とりあえず(大学院に)行っとけみたいな話を聞いて、なんかそしたらまずは英語がんばらないとって急に思いはじめて。(2016年4月)

大学院進学へ興味を持った際は、受験することになっているTOEFL ITPへ向けて自分のペースで文法の復習をしたり、単語を覚えたりしていたそうである。このような学習をエミは新鮮で楽しかったとも振り返っていた。しかし、この状況は長くは続かず、すぐに大学院進学は必要ないという結論に至ってしまったようである。その結果、このように取り組む様子は、次のインタビュー時には、見られなくなってしまっていた。

このようにエミは英語に対して苦手意識を持っており、積極的に英語を学んでいるとは言えない状況である。エミはまた、英語に対してあきらめのような気持ちを持っており、そのことも英語学習を妨げている要因の1つとして考えられる。

国語ができないから、読解力がないんだから、多分、英語の読解も苦手なんだよって(高校の先生から言われて)。あ、そうだよなって。どんだけ単語とか頑張っても、結局そこだよなって思って。そこからはやる気なくなりました。(2016年2月)

辞書が使える環境で和訳をしても、和訳ができないんですよ。て考えたときに、単語をがんばっても、何をがんばっても、もうだめじゃんって思って。(2016年2月)

エミは、そもそも国語が苦手なのだから、英語なんてできるはずがない、辞書を使ってやってもできないのだから、何をしてもだめなのではないかと、感じてしまっている。このような否定的な気持ちも、英語を勉強しようという気持ちを妨げていると考えられる。

エミは苦手意識が強く、自ら進んで英語を学ぼうという気持ちを持つことができない状態である。英語学習に対して、自分なりの意義や目的を見出せていないこと、英語に対してあきらめのような気持ちを持ってしまっていることが、大きな影響を与えていると考えられる。

6. まとめと考察

ここまで3名の学習者がどのように英語学習へ取り組んでいるか、またそのような取り組みへ影響を与えているものは何かという点を見てきた。まとめると、表6.1のようになる。表6.1から明らかであるように、学習者はそれぞれ異なる要因から影響を受け、それぞれの

表6.1 英語学習への取り組みと取り組み方へ影響を与えていること

| 参加者 | 英語への取り組み | 取り組みへ影響を与えていると考えられること |
|-----|--|--|
| レイ | 選択授業への参加、ディベート部所属、TOEFL iBTの勉強 | 明確な目標、英語力に対する不満 |
| ユキコ | 必修授業への参加、シャドーイングに取り組む、ニュース記事を読む、TOEFL ITPの勉強 | 苦手意識、明確な目標の欠如、やらないといけないことはやる、漠然とした英語の必要性 |
| エミ | 必修授業への参加 | 目的や意義、目標の欠如、英語に対するあきらめ |

要因が互いに影響しあった結果として、学習が形成されていると考えられる。自律した英語学習には、これが影響するというわけではなく、それぞれが置かれている状況において、様々な影響を受けることで、学習が形作られていくのではないかと思われる。

Dörnyei and Ushioda (2011) によると、外国語学習を行う上で、明確な目標設定を行うことが大切だと示されている。本研究は、この点に一致する部分もあったが、一方で一致しない部分も見られた。レイに関しては、明確な目標を持つことで、積極的に英語学習と関わることができたと考えられ、一方レイとは反対に、エミは目標が欠如していることから、英語学習に自ら進んで取り組めていないようであった。ユキコもエミと同様に、明確な目標は持っていないようであった。しかしながら、ユキコは漠然と英語の必要性を感じていたこと、やるべきことにしっかりと取り組みたいと考えていたことから、目標が欠如していたとしても、学習できていたようである。よって、必ずしも全ての学習者にとって、明確な目標が必要というわけではないと考えられる。この点に関して、今後さらに検討していく必要がある。

7. 今後の研究

以上を踏まえた上で、今後の研究として、自律の度合いを測定する手法を検討する重要性がまず挙げられる。前述のように、学習者は自律している状態、していない状態のどちらかに属するのではなく、自律の何らかの段階に到達していると考えられる。本論文で見てきた学習者3名に関しても、それぞれ段階は違うものの、多少なりとも自律していると考えられる。よって、学習者がどの段階まで自律できているのか把握する手法を検討することが大切である。そうすることで、さらに自律的な姿勢を伸ばすためには、何が必要かということを検討することにもつながる。

また、教室外の自律した学習を促進するために、教室内で取り入れることができる活動を

検討することも重要である。学習者にとって、結局は教室内の活動がきっかけとなるため、教室外の学習へつながる活動を検討し、取り入れることが必要だと考える。

8. 自律を促進する上で、教室内で取り入れることができる活動

最後に、学習者の自律を尊重、促進する上で、筆者が教室内で取り入れている活動を紹介したい。自律していく上で重要な要素の1つは、自分で選択することである。何を学ぶのか、どのように学ぶのか、自分で選択していくことで、動機づけも高まると言われている (e.g., Deci and Ryan, 1985)。筆者は大学生を対象とする授業において、様々な選択肢を学生に与えるように心がけている。以下いくつか活動を紹介したい。

課題において、どこまで取り組むか選択肢を与える

授業外で行う課題に関して、3段階に分けられた課題を準備している。例えばリーディングの課題では、第1段階として、記事の要約を書き、第2段階では、自分の意見、第3段階では、関連する他の記事を見つけ、要約するというものである。第1段階は、必ず全員が取り組み、それ以降は、学生の意思に任せている。

単語テストの問題数を選択させる

単語テストを行う際に、30問、15問、10問のように、いくつか種類を示し、学生自身に選択させた。単語テストの範囲は全て同じであるが、30問の場合は1問1点、15問の場合は、1問2点というように、問題数に応じて、配点が異なることを伝えた。実際、このように単語テストを実施してみると、30問を選択した学生が多かったが、15問や10問を選択する学生も見られ、それぞれ何らかの理由によって、問題数を選択したのではないかと考えられる。

自分で読む記事を見つける

リーディングの授業では、こちらで課題を決めて、課すだけでなく、時には学生自身に自分で読む記事を見つけ、課題に取り組みさせるようにしている。1学期に3回程度実施し、それぞれ学生は記事の要約、自分の考えをまとめ、授業において互いに説明し合っている。

提出自体が自由である課題を課す

提出する必要がある課題に加え、提出してもしなくてもどちらでも良いリーディング課題を毎回学生に課している。英文を読む機会を増やすこと、もっと学びたいという気持ちに相應ることを目的として、実施している。事前に配布するプリントには、記事の内容に関する質問が記載され、自分の考えを書く欄も設けている。約半数の学生が課題に取り組み、提出

している。

このように学生自身に課題を選ばせるなど、選択肢を与えることは、学生が自分の学習に責任を取るということに多少なりともつながっていると考えられる。自分の必要性に応じて選択するということが、自律的な英語学習へ取り組む上での第一歩であり、このような活動を繰り返し行うことで、自律的な英語学習促進へつながるのではないかと思われる。また、学生自身に自分の学習への取り組み方を把握させるために、リフレクションシート（資料3）を活用している。このリフレクションシートは、1学期あたりA3両面1枚で構成されているものであり、出欠、小テストの点数、自身の授業への取り組み方などを確認できるようにしている。このように自身の学習を自分で把握し、何ができていて、できていないのかを知ることにもまた、自身の学習をコントロールすることへつながり、学習に対して責任を持つことにもなると考えられる。

9. まとめ

本論文では、3名の日本人英語学習者に着目し、どのように英語学習へ取り組んでいるか、またそのような取り組みへ影響を与えている要因は何なのかに関して考察を行ってきた。考察を行なった結果として、参加者は、それぞれ異なる要因から影響を受け、要因が複雑に影響しあったことで、英語学習が確立されていると考えられる。英語学習において、自律するためには、これが影響していると、何か明確に示すことができるわけではなく、何が影響を与えるのかは、学習者によって異なると考えられる。よって、それぞれの学習者が何から影響を受け、どのように学習へ取り組んでいるかを把握し、さらに自律して学習に取り組むためには何が必要かを検討し、助言していくことが必要である。例えば、リフレクションシートを活用することで、学生が何を疑問に思いながら学習に取り組んでいるか把握することが可能である。その上で、自分で取り組むことができる学習方法を提示していくこと、また取り組みを評価していくことで、自律学習につながっていくと考えられる。

参考文献

- Benson, P. (2011). *Teaching and researching autonomy in language learning* (2nd ed.). Harlow: Longman.
- Deci, E. L. and Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Holec, H. (1979). *Autonomy and foreign language learning*. Oxford: Pergamon press.

- Kato, S., and Mynard, J. (2015). *Reflective dialogue: Advising in language learning*.
Routledge.
- Murase, F. (2010). *Developing a new instrument for measuring learner autonomy*.
Unpublished PhD dissertation, Macquarie University.
- Nunan, D. (1997). Designing and adapting materials to encourage learner autonomy.
In P. Benson and P. Voller (Eds.), *Autonomy and independent in language learning* (pp.192-203). London: Longman.
- 松村昌紀 (2009). 『英語教育を知る 58 の鍵』 東京：大修館書店.
- 谷津裕子 (2015). 『Start Up 看護研究 第2版』 東京：学研メデイカル秀潤社.

資料1. 学習記録用紙

英語学習記録シート 2016年 月

★今月の目標

| | | |
|--|--|--|
| | | |
|--|--|--|

★今月の学習記録

| 取り組んだこと | 振り返り | 満足度 |
|---------|------|-----|
| | | |

| 取り組んだこと | 振り返り | 満足度 |
|---------|------|-----|
| | | |

★今月の学習全体の振り返り、来月へ向けて

★今月の自分の状況

英語学習へのモチベーションレベルを1-5で表すと、いくつでしたか？

★以下の6つの項目において、どの程度満足していますか？それぞれの項目において、あてはまるもの1つに○をつけて下さい。

(1=全く満足していない、10=完全に満足している)

| | | | | | | | | | | |
|---------------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|
| 目標設定 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| 時間管理 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| 学習教材(自分が使用した教材、アプリなどについて) | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| 学習の工夫 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| 学習の環境 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| モチベーション | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |

資料2. 半構造化インタビュー質問例

- 授業以外で、今どのように英語学習に取り組んでいますか？
- 最近の英語学習でどんなことを感じていますか？
- 最近の英語学習で嬉しかったことや達成感を感じたことはありますか？
- 最近の英語学習で困っていることはどんなことですか？
- 最近、英語を勉強しようと思ったときはどんなときですか？
- 今までの英語学習において、モチベーションが上がったのはどんなときですか？
- 今までの英語学習において、モチベーションが下がったのはどんなときですか？
- 現在の英語学習の目標は何ですか？
- 目標を達成するためにどのようなことに取り組んでいますか？

資料3. リフレクションシート

Reflection Sheet 授業名 () 番号 () 名前 ()

What do you want to achieve in this semester?

| Date | What did you learn in today's class? | Any questions, requests? | Quiz |
|----------------|--------------------------------------|--|----------|
| 1 Sept 22nd | 出席・遅刻・欠席 課題提出 (提出・未提出) | 今日のモチベーション: 1・2・3・4・5 今日の英語学習時間 () | 単語テスト() |
| 2 Sept 29th | 出席・遅刻・欠席 課題提出 (提出・未提出) | 今日のモチベーション: 1・2・3・4・5 今日の英語学習時間 () | 単語テスト() |
| 3 Oct 6th | 出席・遅刻・欠席 課題提出 (提出・未提出) | 今日のモチベーション: 1・2・3・4・5 今日の英語学習時間 () | 単語テスト() |
| 4 Oct 13th | 出席・遅刻・欠席 課題提出 (提出・未提出) | 今日のモチベーション: 1・2・3・4・5 今日の英語学習時間 () | 単語テスト() |
| 5 Oct 20th | 出席・遅刻・欠席 課題提出 (提出・未提出) | 今日のモチベーション: 1・2・3・4・5 今日の英語学習時間 () | 単語テスト() |

Psychological Factors and Classroom Activities that Promote Learner Autonomy

SUEMORI Saki

In Japanese society, the importance of English is increasing these days. It is generally difficult to acquire foreign language including English, and people need to spend a lot of time if they would like to be proficient in language. In Japanese context, the number of English classes students take at school is limited, and it is inevitable for learners to study outside of the classroom (Matsumura, 2009). In other words, learners need to be independent and autonomous in the process of learning language. Because of this, ultimate goal in foreign language learning is to raise autonomous learners. However, how to raise and what influences to help learners to be autonomous learners have not been investigated very much. This study focuses on Japanese learners of English and attempts to see what promotes learning that happens outside of the classroom. Participants were six Japanese learners of English, and they showed their interests to join interviews in the questionnaire study. This study reports three participants among these six. Semi-structured interviews were conducted twice in one semester from January to November, in 2016. Participants also worked on learning journal which the author made based on Kato and Mynard (2015). In this journal, they set their goal in English learning and described how they studied English. They recorded their learning every month and submitted them when they had interviews. The findings revealed that learners got influence from various factors such as the environment, people around them, their goals, their attitudes, and because of these factors, their learning was constructed. The study implies that there is no one specific element which promotes learner autonomy, and various different factors can help learners to be autonomous learners.

